

蜻蛉日記の本文整定について

伊牟田 経 久

On the Textual Criticism of *Kagero-no-Niki*

Tsunehisa IMUTA

0. はじめに

転写をへて伝えられた本に、誤写や衍・脱の存在するのは、さけられぬことであり、宿命と言ってもよからう。しかし、原本からそれほど隔たっていない写本や、原本のかなり忠実な転写本などが伝わっている場合は、まだしも幸運である。蜻蛉日記の場合は、現存写本中の最善本とされている宮内庁書陵部蔵御所本でさえ、江戸時代初期の写本であり、その他の現存する古本系諸本も御所本と共通の祖本に出る同一系統の本と見られており、いずれも本文に多くの欠陥をふくんでいる。契沖にはじまる蜻蛉日記研究の多くの部分が本文研究によって占められていたのも、当然であったといえよう。

古い写本も持たず、同一系統で異本というほどのものもない蜻蛉日記の場合は、校合によって訂しうるところは少ない。多くは、書体の転訛の過程を推測し原型を推定してゆく、いわゆる推測本文批判を施さざるをえない状態にある。江戸時代の研究者たちの書入れや坂徴の『かげろふの日記解環』(以下、『解環』と略称。なお、本稿に引用した文献とその略称—『』に示したもの—については、「引用文献一覧」を参照のこと)などには、それらの苦心の跡を見ることができし、現代の研究者たちも、それら先人の成果を批判的に継承しつつ、本文再建を試みてきた。昭和30年ごろから公にされてきている本文研究は、一々の写本の性格をこまかく吟味し、先人の研究を批判検討しながら、慎重で周到な本文批判を行い、多くの成果をあげてきている。とりわけ、秋山虔・上村悦子・木村正中の三氏による『蜻蛉日記注解』(以下、『注解』と略称)や柿本奨氏の『蜻蛉日記全注釈』(以下、『全注釈』と略称)の精細な研究は、蜻蛉日記の本文研究を飛躍的に発展させた。佐伯梅友博士と筆者と共編で昭和38年に公刊した『かげろふ日記総索引』(以下、『総索引』と略称)の本文も、それらの研究によって批判され、修正しなければならないところが多く出てきており、脚注に取り上げた本文研究の成果も、大幅な補訂を必要とするほど、新しい本文整定説が提出されてきているのである¹⁾。

それら先学の研究成果をうけて『総索引』の本文に批判・検討を加えた結果、問題があるもの、また、『注解』『全注釈』をはじめ諸家の新たに提起された本文批判に対する筆者の見解などのうち、語の用法と文法に関連する若干の問題を取り上げて考察しようとするのが、本稿のねら

いである。もっとも、このような問題点の検討の結果は、さきに刊行された、木村正中氏と筆者との共同担当になる『蜻蛉日記』（日本古典文学全集・第9巻。以下『全集』と略称）の本文に反映しているのであるが、同書の頭注はスペースの制約があって考察の過程までは詳しくふれえなかったため、木村氏の了解をえて、あらためて取り上げることにしたのである。

1. 底本本文の再検討

第一に取り上げるのは、『総索引』では底本（書陵部蔵御所本）を改訂する説に従ったが、再検討の結果、底本のままにおくべきであろうと、判断したものである。

[1] さて、この十一月に、あがたありきのところに、産屋のことありしを、えとはで過ぐしてしを、五十日になりにつむ、これにだにと思ひしかど、ことごとしきわざはえものせず、ことほぎをぞさまざまにしたる、例のごとなり。白う調じたるに、梅の枝につけたるに、冬ごもり雪にまどひし折過ぎて今日ぞ垣根の梅をたづぬる

とて、帯刀の長それがしなどいふ人、使にて……（下・天延元年冬。214⑤²⁾）

父倫寧の所へ出産祝いを贈るところ。下線の「に」は、底本はじめ古本系諸本すべて「こ」であるが、「に」と改訂し「白く調えた産着に」と解するのが通説となっている。『総索引』もそれに従ったが、『全注釈』は、

この「に」は落ち着かぬ感じであるが、『解環』に「白う調じたり」とし、そこで句点にするのも適当とは思えない。…梅の枝につけたその贈り物につぎの歌をつけたというのであって、つぎの歌を読者に理解してもらう上に必要と作者は思い、「白う調じたるに」にさらにことばを加えて、歌をつけた模様を説明したのである。（下・138べ）

と、「に」に問題があることに言及しながら、結局は通説に従っている。

ところで、大東急記念文庫蔵の萩原宗固の『蜻蛉日記草稿』は、版本の本文「こ」のまま、白う調じたる籠

と解して、「産屋には白きいろを用ることゆへ、髭籠を白くぬりて白梅のえだに付たるとみゆ」（下之中・20ウ）と説明し、枕草子、源氏・浮舟、山槐記の中の、色で染めた髭籠（ひげこ）のことを記した部分を引用している³⁾。これは注目すべき解釈であり、これに従うならば、『全注釈』のいう「落ち着かぬ感じ」は解消するのではなからうか。「白い色でととのえた籠を、梅の枝に付けたのに……歌を添えて」（全集）贈ったのである。

「こ」という一音節名詞の不安定さ、出産祝いと籠との連想が困難であるのに対して、白い産着とは結び付きやすいこと、宗固の『草稿』がそれほど自由に利用できにくいという事情など、悪条件が重なったために、改訂の処置がとられたのであろうが、底本のまま読み解こうとすることの大切さを教えてくれる例と言えらるだろう。

[2] また二日ばかりありて、「心の怠りにはあれど、いと事しげきころにてなん。ようさり物

せんにかならん。恐しさに」などあり。

(中・天祿2年1月。124②)

兼家からの手紙に見える「には」の部分は、古本系諸本「は」であるが、従来は「に」を補って読んでいる。しかし、『全注釈』は、補入を避けた改訂を試み、「は」を「に」の誤写と推測し、「おこたりにあれど」と改訂した。安易な補入の処置を取らぬ態度に敬意を表しつつ、さらに一歩を進めるならば、底本の、

心のおこたりはあれど

のまま読むことが考えられるのではなからうか。すなわち、「あれ」は陳述の「あり」で、

○君が名はあれど我が名し惜しも (万葉・二・93)

○…たち別れなば おくれたる君はあれども 玉ほこの道行く我は 白雲のたなびく山を 岩
ねふみ越えへなりなば 恋しけく日の長けむぞ… (万葉・十七・4006)

などの「…はあれど(も)」と同じと解するのである。

ここでも注目すべきは萩原宗固の解である。宗固は、「おこたりはあれど」の本文のまま、「我心のをこたりはうらみ給ふもことなりなれど」と解いている。文意はむしろ、「私の怠慢はあるがそれはそれとして」「私の怠慢といえは怠慢だが」と取るところかと思うが、『解環』以前の読みを示す宗固のこの注釈には、深い読解力に裏打ちされた鋭い見解が散見している。

〔3〕 「『かく参らば、よくきこえあはせよ』など宣ひつる」と言へば、「などか。人のさ宣はずとも、今にも⁴⁾なん」など言へば、

(中・天祿2年6月。151④)

鳴瀧にこもった道綱母のもとに、兼家の代理として、下山を勧めに来た道隆のことばであるが、古本系諸本すべて「きこえあはめよ」とあるのを、書入れ等を参考にして「きこえあはせよ」と改訂するのが通説となっている。しかし、『注解』(昭和43年3月)が、

この改訂は行き過ぎで、「きこえあはめよ」に手を加えずに、「(作者の山籠りを)軽率であると非難申し上げよ」と解けばよいのではないか。さきに来山した兼家の使者にも、かれは「のぼりてあはめたてまつれ」と言った。

と批判するように、底本のままにおくべきところであった。改訂の動機に、あるいは「あはめよ」は穏やかでないという気持ちがあったかとも想像されるが、「あはむ」の意味は、木之下正雄氏の次のような説に従うべきであろう。

軽薄だと非難するのが原義であるが、相手の行為を制止してよい方に導こうとする場合に用いられる。……長上から目下に対するもの……世話すべき者が主人に対するもの……世話になっている男に対するものがある。対立関係にある人の間に用いられた例はない。軽薄だと非難することではあるが、単なる非難軽蔑ではなくて、もっと好意的な、「たしなめる」という程度の場合が多い。(「平安女流文学のことば」91～92ペ)

次の例は、『総索引』では底本のまま読む通説に従っているが、『全注釈』に新しい改訂説が出さ

れているので、再検討してみようとするものである。

[4] このごろは珍しげなう、ほととぎすの群鳥、くそふくにおりるたるなど、言ひののしる声なれど、空をうちかけりて、二声三声きこえたるは、身にしみてをかしうおほえたれば、山ほととぎす今日とてやなど言はぬ人なうぞ、うち遊ぶめる。

(下・天延2年5月。236③)

『全注釈』の批判は、底本「こゑなれど」のままでは落ち着くまい、と言うことで、「こゑすれど」と改訂しようというのである。これは「こゑ」を「言ひののしる(人々の)声」と読み取ったために出てきたものであろうが、この「こゑ」は「ほととぎすの鳴き声」と解すべきものであると思う。すなわち、このあたりは、「このごろは珍しげなう」と「ほととぎすの……言ひののしる」とが並立するような形(あるいは、「このごろは珍しげなう」を「言ひののしる」にかかると解することもできる)で、「声なれど」にまとめられ、<初声のころとは違って、このごろでは珍しくもなく、群鳥が厠におりていたなど悪口まで言われる、そんなほととぎすの鳴き声だが、それでもやはり>という気持ちで、「空をうちかけりて、二声三声きこえたるは、身にしみてをかしうおほえたれば」にかかってゆく、という構造でとらえるべきものであろう。ここは底本のままにおくべきところであって、改訂の要は全くないと考える。

2. 助詞「と」をめぐって

[5] 五日ばかりのほどに昼みえ、また十余日、廿日ばかりに、人寝くれたたるほどみえ、この月ぞ、すこしあやしとみえたる。

(下・天延元年1月。204⑬)

この例も[4]と同じく、『総索引』は底本のままに読む説に従っているが、『全注釈』の新しい批判が出されたので、再検討してみようとするものである。『全注釈』の批判は、

底本「あやしとみえたる」のまま読むと、「見ゆ」は、思われる、というような意味になり、やや落ち着かぬようだが、意が通じぬことはない。しかし近接同語と見、上の二つの「見ゆ」と同じ意に解すべきではないかと思うし、「しく」を「しと」と誤る可能性もあり……同趣の誤写例もあるので、改訂を試みた。(下・107ペ)

というもので、「あやし^くみえたり」と改訂する説であり、『上村』『新訂全書』『注解』(昭和45年3月)『新注釈』がこれを支持している。

この「みゆ」は、たしかに上の二例の「みゆ」と同じく、「姿を見せる」の意に解かなくてはならない(この種の「見ゆ」は、この日記の地の文に40余例を数えることができる)。従って、ここで問題になるのは、「あやしと」の「と」であろう。この「と」は、引用の「と」ではなく、主観的認定に基づく状態の表現と解すべきであり、「変だと思うぐらいに、姿を見せる」の意であると思われる。このような「と」は、ほかに、

○乗る所にも、かつが^つと歩ゆみ出でたれば、(上・康保3年3月。59⑩)

○ひぐらし、さかりと鳴きみちたり。(中・天祿元年6月。105③)

○人々、「はやはや」とそそのかして、わたりたれば、すなはちと見えたり。

(中・天祿2年7月。164③)

などの例を拾うことができる。特に最後の例は、いま問題としている「あやしとみえたる」と類似の表現で、注目される。『全注釈』は、この三例の「と」を、「普通には言わない」「珍しい言い方で疑わしい」「管見にはいない」として、「かつがつも」「さかりに」「すなはちも」と改訂する(ただし、『角川』では、「かつがつと」は他書に例が見出されたとして、底本の形に戻している)。類例を博搜して考える態度には敬意を表するが、これらはすべて同じ用法だと考えられ、語法的にも認められる⁵⁾ので、底本のままにおいてよいと思われる。

ところで、次の二例は、『総索引』では改訂説に従い、〔 〕に示した底本の形を、下線部のように改めている。

○かぎりなき腹をたてて〔たつと〕、かかる所を見おきて、帰りにしままに、いかにともおとづれこず。

(中・天祿2年6月。144①)

○今年いと荒るること〔と〕なくて、斑雪^{はだらゆき}二度ばかりぞ降りつる。

(下・天延2年12月。252⑥)

しかし、この底本の「と」も、上に見てきた「と」と同じ用法で、前者は「かぎりなき腹をたつ」という状態で、の意で、「いかにともおとづれこず」にかかり、後者は「いと荒るる」という状態では「なくて」の意(連体形「荒るる」は、「荒るることよ」の意の連体形止め)、と解すべきものであって、改訂の要はないところであった。底本のままにおく説に従いたいと思う。

〔6〕我が住む所にあらせんといふことを、我が頼む人<=父倫寧>定めて、けふあす、広幡・中川の程にわたりぬべし。「さべし」とは、さきざき<兼家ニ>ほのめかしたれど、「けふなどもなくてやは」とて、きこえさすべきこともしたれど、「慎むことありてなん」とて、つれもなければ、何かはとて、音もせでわたりぬ。

(下・天延元年8月。211⑦)

この例の下線部は、古本系諸本みな同じであり、従来はそのまま読んできたが、解釈には諸説がある。主なものをあげてみよう。

『全講』(『講義』や『新訂全書』も同解)——お話しなければならぬ事があると言ってやったけれども。

『全注釈』——地の文において作者から兼家に対し「きこえさす」を使った例がなく、下文に作者から知らせのなかったことを兼家がとがめている所から見ても、主語は作者でなく、倫寧としなくてはなるまい。「父からご挨拶したけれども」の意。

『注解』(昭和45年7月)——「きこえさすべきこと」は、倫寧の言葉「けふなどもなくてやは」と実質的に等しく、地の文に属しながら、倫寧の立場から兼家に対する敬語が用いられている。

「ものしたれど」は、倫寧から作者に注意したけれどもの意。「御報告すべき旨を注意してくれたけれども」。

「きこえさす」を地の文として読めば、『全注釈』や『注解』のような苦心の解をしなければならぬ。『全講』など喜多氏の解は自然にきこえるが、本文に忠実とはいえない。これら先学の苦心の跡をたどり、『全講』の読みに対する『注解』の批判——それならば「きこえさすべきことありともものしたれど」となければならぬ——を参考にして考えると、「きこえさすべきこと」を作者から兼家への手紙（または言づて）と見、その次に「と」（ここでは「ゝ」でよい）が脱落したものと推測して補入する処置をとるのが、無理のない読み方であると思われる（底本の「と」脱落と推定される箇所は約20、「ゝ」脱落と推定される箇所はそれを上まわる⁶⁾）。すなわち、

「きこえさすべきこと」ゝ（と）ものしたれど

となり、解釈は『全講』など喜多氏の諸書のそれと同じになろう。そして、このように解することによって、後続の部分（例えば、「さなむとは告げきこゆ……」のあたり）も、スムーズに理解できると思うのである⁷⁾。

[7] さて、なほここには<遠度ノ養女ニ対スル求婚ガ>いといちはやき心ちすれば、思ひかくることもなきを、「これより『かくなん仰せありし』とて、責むるごときこえよ」とのみあれば、
(下・天延2年4月。226⑫)

下線部は、まことに難解な部分である。「ありし」は、底本はじめ古本系諸本「ありき」とあるものを、「かくなん」に対する結びとすることで、連体形「し」に改訂した⁸⁾のであるが、『全注釈』のいうとおり、「き」と「し」との字体相似の可能性は乏しく、安易で軽率な改訂であった。「かくなむ」の結びが他に考えられないかどうかもふくめて、再検討しなければならない。

従来の研究を見よう。『大系』は、遠度が道綱に言うことばと見て、「私（遠度）からこうおっしゃったと言って、責めるように催促しなさい」とし、『全講』は、「こちら（遠度）から『（兼家ガ）こうおっしゃった』とて催促していることを（作者カラ兼家ニ）申し上げてください」とするが、前者は「仰せ」、後者は「きこえよ」の敬語の用法に難があり、「かくなん……ありき」の係り結びの破格は両者とも不問にされている。『全注釈』は、「かくなむと」と「と」を補入することで「ありき」の問題は解決したが、遠度のことば（これより……きこえよ）のすべてが兼家のことばの引用（「……きこえよ、とあり」と書くべき所を端折った）とし、「『わたしから、かようかようと仰せがあったとって、せきたてるようお願いせよ』との殿のおことばです」と訳すが、これも特異な読み方で、すぐには従えない。

このように、従来の解は、いずれも満足できないが、「仰せありき」が「かくなん」を受けるのではないとする『全注釈』の見方は、従うべきであろう。しかし、『全注釈』の訳では、「かくなん」がどこにかかると見たか必ずしも明らかではなく（むしろ「仰せ」にかかると解しているように見える）、「かくなん」の次に「と」を補入した処置が生かされていないように思われる。「か

くなん」の次に「と」を補入するより、「かくなん」を「責むる」にかかると見てはどうであろうか。そのためには、「責むるごと」の「ごと」（底本は「こと」）を「と」の誤りと見て改訂する必要があるが、この誤写例は他にもあり⁹⁾、可能性ある改訂であると考え。すなわち、

「これより、かくなん、『仰せありき』とて、責むると、きこえよ」

と本文を定め、「私（遠度）の方から、こんなふうには、『殿からの仰せがありました』と言って、せきたてていると、あなた（道綱）から母上に申し上げてください」と解するのである¹⁰⁾。

3. 語の用法や文法をめぐって

古本系諸本による校合によって訂しえない所で、本文に問題があるのではないかとの疑いをかけられるのは、多くは文意不通であるとか、語の用法が誤っていると考えられる箇所であろう。しかし、だからといって、安易に合理的本文に改めてしまうことがどんなに危険であるかは、以上の検討・考察からも明らかであろう。ほんとうに底本のままで読めないのか、誤写ありとすればどのような書体転訛が考えられるのか、細心周到な検討が必要なことはいうまでもないが、それと同時にその時代の語の用法や文法についても、精細な研究が必要となる。『総索引』の本文には、そのような配慮をおこたり、従来の改訂説を慎重に検討することなしに継承したところがあり、再検討・再批判を要する箇所も少なくない。以下、語の用法や文法から見て問題となるいくつかの例を取り上げて、考察してみたい。

〔8〕 いかなるにかありけん、このごろの日、照りみ曇りみ、いと春さむかる年とおほえたり。

（下・天祿3年2月。175⑨）

この例には、形容詞の連体形として「さむかる」の形が用いられている。周知のとおり、形容詞の連体形は、キ語尾を用いるのが普通であり、カル語尾は「らむ」「べし」などの助動詞を下接する場合に用いる（「多し」「多かり」の場合は事情が異なる）ので、この例は珍しい例ということになり、山田孝雄博士の「平安朝文法史」はじめ諸書に引用されることが多い。

しかし、この部分は底本「さむる」であり、カル語尾は改訂によって生じた形なのであろう¹¹⁾。とすれば、「か」を補入して特殊な語形を認めるよりは、「る」を「き（支の草体）」の誤写と推定し、「さむき」と改訂する方が穏やかであろう（『全注釈』も別案としてあげている）。

〔9〕 年月の^{かうじ}勤事なりとも、今日の参りには許されなん、とぞおほゆるよしおほし。「明日はあなたふたがる。あさてよりは物忌なり。すべかめれば」など、いとことよし。

（中・天祿2年12月。167⑩）

これも形容詞に關係する問題である。下線部は、従来、底本の「よしおほし」のままで読んでいた。これに対して、『総索引』は、脚注に、「ぞ」の結び「おほゆる」が体言「よし」にかかることと、和文では終止形には「多かり」を用いるのが普通であるのに「多し」を用いること、の二点は、

不審であり、本文に疑いがある、と問題を指摘したが、改訂案を出すには到らなかった。『全注釈』は、「年月の……すべかめれば」をまとめて兼家のことばとし、「……とぞおぼゆる。なおほし。あすは……」と本文を定め、「なおほし」を「きげんをお直し」と解く案を提示した。しかし、『角川』では、「よしおほし」のままにして、「誤写であろうが、改訂の良案が得られない。恐らく『おほし』は『おぼし』で、下の『いかにおほしけむ』のごとく、気をもむ意と察する」と注している。また、『注解』（昭和43年10月）は、「よ（与の草体）」は「な（奈の草体）」の誤りで、「し」は「と」の中央のえぐりの浅い書体を誤ったものと見、このあたりに「など」「などで」が会話を受けて多用されていることをも勘案して、『年月の……とぞおぼゆる』などおほし。『あすは……』と本文を定めたが、「多し」を用いる点の不審は、「なお検討しなければならない」として保留した。

「勘事」や「参り」という語を用いること、「ぞ」の係り結び、などから考えて、「年月の……おぼゆる」は、たしかに兼家のことばと見なければなるまい。しかし、終止形「多し」を用いることはやはり問題であり、『全注釈』や『角川』の案も採用しがたい。以上のような諸点を勘案し、『注解』の説を一步すすめて、「し」を「く」の誤写と見、「おほく」という中止法と解するのがよいのではないか。「……など多く、……などいと言好し」で兼家のことばをつなぐことも、この場面にふさわしいであろう。

[10] 山ごもりの後は、「あまがへる」といふ名をつけられたりければ、かくものしけり。「こなたざまならでは、方も」などしげくて、

大葉子の神の助けやなかりけん契りしことを思ひかへるは

などやうにて、

(中・天祿2年12月。168⑤)

いま一つ、形容詞の問題を取り上げる。下線部は、古本系諸本みな「けしく」とある。喜多義勇氏の旧著や『総索引』は、転倒誤写と見て「しげく」としていたが、『大系』『全注釈』などは、「けしく」のまま、「不審そうに書いて」（大系）、「意地の悪いことを書いて」（全注釈）、「皮肉って」（注解）などと解し、これが通説となってきた。

平安時代の形容詞「けし」は、木之下正雄氏の言われる¹²⁾ように、「けしうは——打消」「けしからず」の言い方がほとんどで、「けしうつつましきことなれど」（蜻蛉・下・天祿3年2月。181⑪）や、「いでや、けしうはあらむ。あな古体」（榮花・見はてぬ夢。大系、上・155⑤）は、きわめて稀な例である。とすれば、いま問題としている箇所を、底本のまま「けしくて」と読むことには問題があると考えなければならないであろう。一方、「しげくて」と改訂すれば、「沢山のことを書いて」（全講）と解することになるが、この場面にそぐわない表現である。改訂を考えなければなるまい。

「け」を「物」の誤写と見、「物しくて」と本文を定めてはどうであろうか。「こなたざまならでは、方も、など物しくて」は、道綱母の思いをはさみこんだものと見、「こちら以外なら方角もふさがらないらしいわなど、不快に思われて」（全集）と解するのである。

〔11〕 さし離れたる廊のかたに、いとようとりなししつらひて、端に待ち臥したりけり。火ともしたるに、いけさせて、おりたれば、いと暗うて、（上・康保3年3月。58⑤）

下線部は古本系諸本みな同じ。従来は、そのまま「い消させて」と読んできた。すなわち、動詞「消す」に接頭辞「い」のついたものと見るのであるが、そうであれば、「前代のことばが化石的に残存する珍しい例」（大系・頭注）ということになる。柿本奨氏は早くこれに不審を抱き、「い」を「ひ」の誤りと見て、「ひけさせて」と改訂する案を示された¹³⁾が、後に『全注釈』では、底本のまま読むべきであろうと、改められた。

しかし、接頭辞「い」のついた動詞は、平安時代の仮名散文には見出だしがたいし、「消す」という動詞を用いることにも疑問がある。この時代の和文では「消つ」を用いるのが普通であり、蜻蛉日記にも、「うちやけつらん」（11⑦）、「あが君とある上はかいけちたり」（220⑩）、「上かいけちて」（241④）、「火ともしたれど、ふきけちて」（161⑫）の例が見える。源氏物語や枕草子にも、「消つ」は見えるが、「消す」はない¹⁴⁾。このような点から、やはり「いけさせて」には誤写がひそむと考えざるをえない。

注目されるのは、第三類本や『解環』の「ひけたせて」という本文であるが、「火」の重なりすぎることも考慮して、上の「に」を「か」の誤写（「可」の草体と「尔」の草体との類似による）、「さ」を「た（多の草体）」の誤写と推測して、「ひともしたる、かいけたせて」と改訂したい。

〔12〕 わがもとの¹⁵⁾はらから一人、又人もかへり物したり。（中・天祿2年6月。140⑫）

下線部は、古本系諸本「かへりもに」である。従来は「もに」を衍として削り、「かへり物したり」と読んできたが、『全注釈』は削除の処置を避け、「かへりみに物したり」と改訂した。これに対して、『注解』（昭和42年9月）は、

新見として興味深い説ではあるけれども、恩顧や報恩などの語意を内包せずに「かへりみ」といえるかどうか、またこの妹たちは翌朝帰京してしまうが、作者の世話をしに来たとしては早く帰りすぎるのではないか、という疑いも残る。

と、適切な批判を加えたが、「もに」或いは「ともに」かとの一案をあげながら、結局は「もに」を衍として削る通説に従ったのである。

ところで、この通説の「帰りものす」は、不審な語である。「帰る」という動詞を用いながら、「ものす」を重ね用いる要はないからである。やはり「もに」をふくめて本文を批判しなおさなければなるまい。考えられる書体転訛のうち、可能性のあると思われるのは、「ろ」を「か（可の草体）へ」の二字に誤写し、「と（登の草体）」を「り（里の草体）」に誤ったという推定である。すなわち、「又人もろともに物したり」と改訂し、京の家に同居している妹が、他の人とつれだつてやって来た、と解するのである。

〔13〕 「……かくておはしますをみ給へおきて、まかり帰ること、と思ふ給へしに、いぬるめ

もみなくれまどひてなん。……」

(中・天祿2年6月。148⑨)

下線部を古本系諸本の本文「いぬめ」のままでは読めないだろう。そこで、古くから「る」を補入して「いぬるめ」とし、「去ぬる目」と読む解が行われてきた。『絵索引』もそれに従ったのである。しかし、『全注釈』がいう¹⁶⁾ように、他に例を見ないし、やや異様な表現のようにも思われる。これに対して、『全注釈』は、「いやめ」と改訂し、「涙ぐんだ目」と解した(訳では、「涙があふれて、目もすっかり見えなくなりまして…」とする)。

「いやめ」という語は、源氏物語に次の4例が見える(引用は大成により、表記は適宜改める)。

○つきせず思ひほれたまひて、新しき年ともいはず、いやめになむなりたまへる。(早蕨1678)

○なぞかくいやめなる、と憎くをこにも思ふ。(東屋1848)

○人には、ただ御病の重きさまをのみ見せて、かくすずるなるいやめのけしき知らせじと、かしこくもて隠すと思しけれど(蜻蛉1942)

○いとどいやめに、尼君は物し給ふ。(手習2012)

例が少なく断言はしにくいだが、形容動詞と見るべき語ではないかと思う¹⁷⁾。第三例(蜻蛉の巻の例)は「の」のついた形であるが、形容動詞の語幹に「の」のつくことは、「いとまめにきすくの人にておはす」(源氏・初音771)、「常よりもわりなきまれの細道を分け給ふほど」(源氏・浮舟1890)など、類例はあり、支障はない。とすれば、「いやめ(ガ)くれまどふ」という表現は、認めるわけにはゆくまい。別な角度からの批判の必要があるように思う。『絵索引』の脚注に考える一つの試案として提示したものであるが、「い」は「は(ハ)」の誤写、「ぬ」は「め」の誤写で次の「め」と重複するものと推測し、「思う給へしには、めもみなくれまどひて」と改訂したい。

[14] 春日へとて、宿院のいとむつかしげなるにとどまりぬ¹⁸⁾。あれより立つほどに、雨風いみじく降りふぶく。(中・天祿2年7月。161④)

[15] 八月といふは、あすになりたれば、あれより四日、例の物忌とか、あきてふたたびばかり見えたり。(中・天祿2年7月。164⑦)

蜻蛉日記には、この2例の指示代名詞「あれ」が見える。古本系諸本は、吉田本が[15]の例を「めれ」に作るほか、すべて「あれ」である。

江戸時代の書入れ等には「それ」または「かれ」かとするものもあり、『解環』は、[14]について「あれよりのあは、かのかなの転誤にて、かれよりにや。されど、姑原のままにす」、[15]について「原本にめれよりとあり。よまれず。故に、それよりと直しおけれど、尾本を見て、あれと直せしも、又不穩ども、めとあとちかければ、姑かれに従ひぬ」とするが、『解環補遺』は両方とも「それ」の誤りとする。江戸時代の研究者たちが、この二つの「あれ」を疑問視し、改訂案を摸索しているさまをうかがうことができる。

現代の研究者は、川口久雄氏が[14]を田中大秀氏に従って「それ」と改訂された¹⁹⁾ほかは、底本のまま「あれ」を認めている。『全注釈』は、[14]について、『解環』や『解環補遺』の説を引いて、

「あれより」は誤写でなく疑うべきでない。現代語の「それより」ぐらいの意味であって、「あれ」は遠称と限定すべきものではない。(上・496ペ)

と、改訂することを積極的に反対された。

しかし、この時代の「あれ」を調査してみると、用例は少なく、用法も人や物について、はっきりしない場合や、ことさらにおほめかして言う場合に限られており、この二例のように、場所や時について用いた例はない²⁰⁾。やはり本文に問題があると見なければならぬであろう。そこで注目されるのは、上巻末の初瀬詣での記事に「それより立ちて、いきもていけば」(75⑤)とあり、四日の物忌については、「けふより四日、この物忌にやあらむ」(175⑬)と記していることである。これを参考にし、[14]では「そ(所の草体)」から「あ(阿の草体)」への書体転訛(楚の草体→愛の草体、とも考えられる)、また、[15]では「けふ(計不の草体)」から「あれ(阿礼の草体)」への転訛と推定し、改訂したい。

次の例は、『総索引』と『全集』だけが底本を改訂し、他は改訂の処置をとっていないので、改訂の是非について検討を加えようとするものである。

[16] 「それもいかが侍らん。不定なることどももはべめれば、屈しはてて、またをらすするほどもやなり侍らん。……」
(下・天延2年5月。238①)

古本系諸本みな「おらす」とあり、それを「折らす」と読み、その「す」は使役と解するのが通説である²¹⁾。しかし、四段活用の使役動詞「をらす」を認めることはできないであろうし、使役の助動詞「す」ならば、連体形は「する」とななければならないはずである。ここは「る」補入の処置を認めるところであろう。

なお、「する」とあるべきを「す」と誤っているところが、他に2例ある。

○幼き人ひとりつかれたる顔にてよりゐたれば、餌袋なる物とりいでて食ひなどするほどに、わりご持てきぬれば<底本「す」。その他の諸本「する」> (中・天祿元年6月。103⑬)

○人々とほしがりなどするほどに、夜はあけぬ。<古本系諸本「す」>

(中・天祿2年6月。136⑦)

これらも[16]と同じく「ほど」に続く場合であるのも、誤写条件の共通性として、注目してよいであろう。

4. 係り結びをめぐって

底本はじめ古本系諸本の中には、次の例のような係り結びの整わないところはいくつかある(底本の表記のまま引用するが、濁点をつけ、おどり字を改める)。

○なでしこのはなにぞ露はたまらざりけり (上・天曆8年秋)

○まちのこうちなるそこそこになんとまり給ひぬとて (上・天曆8年10月)

○しげさはしる人もなしとこそ思ふたまへし (中・天祿2年7月)

これについては、すでに言及したことがあり²²⁾、『総索引』の本文でも、諸家の改訂案を参考にしながら、改訂したのである。しかし、その中には軽率な判断による失考もあったし、その時には気付かなかつたり、疑問を残して改訂を控えたものもあったので、それらの係り結びに関連する問題のいくつかを取り上げて、考えてみたい。

[17] まだ暗きより行けば、黒みたるものりてぞ、おひて走らせてくる。やや遠くよりおりてつひざまづきたり。見れば隨身なりけり。 (上・安和元年9月。76⑩)

初度の初瀬詣での帰途の一節。下線部の底本表記は「ものゝてそおひてはしらせてく」である。古本系諸本も、彰考館本が「ゝ」を「の」とするほか、みな同じ。これを、『講義』『大系』などは、「のりてぞ、おひて」と「り」を補入して読んできたが、結びの「く」は底本のままにいていた。これに対して、柿本獎氏が、このままでは係り結びの破格であり、「くる」と改訂すべきであると指摘され²³⁾、大勢はそれに従う方向にむかった。しかし、柿本氏は、『全注釈』では、「黒みたる者、乗りてぞ追ひて」と読むことに疑問を投げかけ、「黒みたる者、ものを負ひて」と改訂して読まれたのである。

その疑問とは、①馬に乗ることを、単に「乗りて」と言うだろうか、②「追ひて」を馬をせきたてる意にとることは、当時の用法から考えて、ありえない(後代にはその用法もあるが、その場合も、せきたてる人間は徒歩であって騎馬ではあるまい)、③従って、「追ひて」と読むと、作者一行を追いかけることになるが、宇治から出迎えに来た隨身が作者一行を後から追うはずがない、④底本のまま「走らせて来」と読むと、「乗りてぞ」の係りに応じない(上・243ペ)、というものであり、適切な批判である。「のりてぞ」と「り」を補って読み、その「ぞ」に対して「く」を変えて「くる」にしてしまう、まことに安易軽率な改訂は、きびしく反省しなければならない。しかし、底本の「ゝてそ」は「ゝ(の)んを」の誤写で、その「ゝん」は「ん(も)の」の転倒誤写とする『全注釈』の推測は、全くありえないことではないにしても、『全注釈』自身も記すように、良案考究の余地があるかもしれない。

「黒みたる者」と読むことは動かないだろうし、文末も「走らせて来」であろう。「おひて」を「負ひて」と読むことも『全注釈』のいうとおりであろう。とすると、問題は「ゝてそ」にしぼられる。しかも、その「そ」は係助詞「ぞ」ではなからう。そのように限定し、書体転訛を考えてゆくと、「そ」は「うと」二字の連続を誤写したものではないかと推測される。すなわち、

くろみたるものゝ、てうとおひて、はしらせてく

ということになる。「てうとおひて」は「調度負ひて」であるが、枕草子にも、

三位の中将は陣に仕うまつり給へるままに、調度負ひて、いとつきづきしう、をかしうておはす。(大系 278 段。298 ペ)

の例があり²⁴⁾、武官が弓箭を帯すること。隨身のさまとして適当であろう。

なお、「調度」のよみは、前田本色葉字類抄には、「調度(平濁平濁) テウト/胡籛……」(テ雑

物)と、「調度(平平濁)同<家計>/テウト」(テ疊字)の二つが見え、ここは前者であるから、「でうど」とすべきかもしれない。

[18] はらへのほどに、けだいになりぬべくながら来る。(中・天祿元年6月。104⑥)

唐崎のはらえの記事の一文であるが、底本「けいた」を「けたい」の転倒誤写と見、それを「懈怠」と解するのが通説となっており、『総索引』の本文もそれに従っていた。しかし、「懈怠」という漢語は、こんな場面でも用いられるものであろうかという吟味を怠ったのは、まことに軽率であった。

「懈怠」はもともと仏教語であり、平安時代の物語や日記では、念仏や修行を怠ること(源氏の若菜上と柏木、紫式部日記、狭衣、浜松中納言、栄花・浦々の別れ)、転じて、勤務を怠ること(源氏・浮舟)に用いている²⁵⁾。『全注釈』の引く例(前後を補って引く)、

よべ後の宮の悩みたまふよし承りて参りたりしかば、宮たちのさぶらひたまはざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御代りに今までさぶらひ侍りつる。けさもいと懈怠して参らせたまへるを、あいなう、御あやまちにおしはかりきこえさせてなむ。(源氏・東屋1817)

は、薫が中の君に語ることばに見えるものであるが、中の君の夫である匂宮が母後の病氣見舞いに遅参したことをさしていること、薫は思うところがあって匂宮の留守をねらって来ているという場面であること、などを考慮すると、わざと堅苦しい用語を用いたもので、源氏・浮舟の例と同じ用法と見てよいようである。このような「懈怠」の用法から考えると、「けだい」とする改訂案は、むしろ否定されるべきだということになる。

いま一つの問題点は、文末の「来る」である。この改訂案のままでは、連体形止めということになるが、それでよいのだろうか。柿本奨氏は、「本日記においてはなるべく地の文に連体止めの生じない読み方をすべきものと考え²⁶⁾」書体転訛の可能性があれば終止形に改訂する態度をとっておられるが、この「来る」はそのままにし、『角川』の「解説」には、地の文における連体止めはこの一例だけである(334ペ)と、特に記しておられる²⁷⁾。つまり、底本はじめ古本系諸本の「くる」は、このままの形で考えなければならぬ(連体形止めか、係助詞に対する結びか)ということになる。

ここで注目されるのは、古本系諸本の中に、底本の「けいた」の部分を「そいた」とする本があるということである。「け(介の草体)」と「そ」とは誤写のおこりやすい類字体であるが、これまでに見てきた条件を総合して考えれば、底本の「け」が「そ」の誤写であり、その「そ」は、文末の「くる」に対する係助詞「ぞ」と解するのが適当であるということになる。そして、「いた」は「はした」の誤写——「は(ハ)した(多の草体)」の連続を「いた(多の草体)」の連続に誤ったもの——と推定し、[18]の文を、「はらへのほどにぞ、はしたになりぬべくながら、来る。」と読みたいと思う。

さきに〔9〕の中でもふれたように、係り結びの呼応関係にある結びの文節は、連体修飾語とはならないのが原則である²⁸⁾。従って、

〔19〕 たえずぞうるふ さ月さへ 重ねたりつる 衣手は うへしたわかず くたしてき
(中・安和2年6月。89^⑫)

について、『全注釈』が、

「うるふ」は「潤ふ」に「聞」をかけ、「五月」の修飾語。体言にかかる修飾語中に「ぞ」は現れない例だから、底本のまま「たえずぞ」とすることはできない。上野本・大東急本・彰考館本・無窮会本は「たえずに」に作るが、歌では「たえずも」が多く使われているようであるから、そのように改訂を試みた。(上・286ペ)

というのは、一般的にはそのとおりである。しかし、歌の場合には、次のような例もある。

○恋ひ恋ひてまれに今宵ぞあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ (古今・恋三。634)

○……千歳へむ 君がみそぎを 折りてぞ かきながしやる 川瀬にも かたへ涼しき 風の音に…… (栄花・岩かげ。上・313ペ)

ことに、古今の例は、「たえずぞうるふ五月」と同じように、結びがかけことばになっていることも注目しなければならない。また、「たえずぞ」の形も歌に見える(古今六帖)ので、ここは底本のままでよいと思う。

しかし、次のような例は、『総索引』の読み方では適當でない。

〔20〕 「うせ給ひぬる小野宮の大臣の御召人どもあり。これらをぞ思ひかくらん。近江ぞあやしきこと」などありて、「色めく者なれば、それらにここに通ふと知らせじと、かねてたちおかむとならん」と言へば、
(中・天祿元年7月。111^⑬)

この読み方では「ぞ」に対する結び「あやしき」が「こと」を修飾することになる。ここは、『大系』や『全注釈』に従って、「近江ぞ、あやしきことなどありて、色めく者なれば……」と、続けて読む方が適切である。

〔21〕 「……紙の色は、昼もやおぼつかなうおぼさるらん²⁹⁾」とて、これよりぞ物したりける折に、法師ばらあまたありて、騒がしげなりければ、
(下・天延2年5月。240^⑭)

この例も、「ぞ」の結び「ものしたりける」が「折」にかかることになり、問題である。『全注釈』の「ぞ」を「も」の誤りとして改訂する説に従うべきであろう。

次の諸例は「なむ」の場合であるが、上の諸例と同じように、再検討の必要があろう。

〔22〕 「あとには、問ひなども、ちりのことをなむ、あやまたぎなる^{ざん}才、よくならへとなん、聞こえおきたる、と宣はせよ」と書いて、
(中・安和2年閏5月。88^⑮)

〔23〕 みづからふたたびばかりなど物して、いかでにかあらん、ひとへぎぬの限りなん、取りて物したりしことどもなどもありしかど、忘れにけり。

(下・天祿3年2月。178⑩)

この二例とも「なむ」に対する結びが体言を修飾することになるが、これまで全く問題にされていない。「なむ」の場合には、

○え行きもとぶらはず、しのびしのびになむ、とぶらひけること、日々にありけり。(大和・165段。大系334ペ)

○かう心ちなむ弱くなりたること、告げにやり給へ。(宇津保³⁰)

などの例もあり、「ぞ」の場合ほど厳密でないのであろうか。なお用例を求め、考えなければならぬが、係助詞の文の結びを規制し完結する機能から考えて、結びとして完結する読み方ができる限りは、体言に続けずに切る読み方をすべきであろう。しかし、〔22〕はどのように処置すべきか良案がない。「なむ」が「も」とあれば、表現上も意味上も具合が良いとは思いますが、軽率な結論は控え、存疑の箇所して、後考をまつことにしたい。〔23〕は、「ものしたりし」で終結しているものと見て、句点にしたい。「ことなど」ではなく「ことどもなど」とある点からも、「取りて物したりし」に続けてはおかしくなりはしないか。その「ことどもなど」は、兼家と兼忠女との間に他にもいろいろの事などがあつたのを指すのであろう。

〔24〕十日ばかりに、また昼つ方みえて、「春日へなん。詣づべきほどのおぼつかなさ」にあるも例ならねば、あやしうおぼゆ。(下・天延元年2月。206⑦)

この例も、一般には「なん」で切らずに続けている。しかし、それでは結び(詣づべき)が連体修飾語になるので、それを避けて、『総索引』は句点としたのである。だが、「春日へなん詣づべき」という文勢も捨てがたい。とはいえ、そこで句点にしては、「ほどの……」が落ち着かない。『全集』では、「なむ」で句点にせず、

「なむ」の結び「……べき」が体言に続くこと不審。正しくは、「…詣づべき。そのほどのおぼつかなさ」というところである。(342ペ)

と注し、解決を留保した。

これまでの諸例とはやや異なるが、特殊な例に、次のようなものがある。

〔25〕「……にはかにもいくばくもあらぬ心ちなんするなん、いとわりなき。あはれ、死ぬとも思し出づべきことのなきなん、いとかなしかりける」(上・康保3年3月。56①)

「心ちなんする」というまとまりが、さらに「なん」を伴うというのは、いかがであろうか。『全注釈』は、整わぬ言い方と見ているらしく、次のように記す。

「心ちなむするコト」+「なむ」の形。しかし言い方を整えれば「なむ」はどちらか一つで足りるところ。「ちりの事をなむあやまたぎなるざえよくならへとなむきこえおきたる」も似た趣。(上・168ペ)

ここに引用された例(本稿の〔22〕の例)は、はじめの「なむ」の結びに「なむ」が続いているのではなく、事情は異なる。また、『注解』は、「なん」の重なりを積極的に認めて、こう記す。

大東急本の書入に、「心ちなん」の「なん」を衍とする説が見られるが、それはかえって作者の筆法の特徴を抹殺するさかしらというべきである。他にも「……といふしもぞ聞かでぞおいらかにあるべかりけるとぞおほえたる」(中巻、天祿二年、鳴瀧籠りから戻った直後の記事)など、同種の文がある。ことにこの場合、「なん」の重複が、兼家の切迫した口調を効果的に写している点も、見落せない。(昭和39年3月)

ここに引用された例は、「いふしもぞ」と「……あるべかりけるとぞ」とが並んで「おほえたる」にかかる(「聞かでぞおいらかにあるべかりける」は引用句で、下の「とぞ」でまとめられるもの)と見るべきであろう。このような例は、稀ではあるが、ほかにもある。

○幼き人も「御供に」とてもすれば、とかく出だしたててぞ³¹⁾、その日の暮にぞ、我ももとの所など修理し果てつれば、わたる。(中・安和2年6月。92⑤)

○「物のいと恐しかりつるみささぎのわたり」など言ふにぞ、いとぞいみじき。

(中・天祿2年6月。147⑥⑦)

○后は、おほやけに奏せさせ給ふ事ある時々ぞ、御たうばりの年官年爵、何くれの事にふれつつ、御心になはぬ時ぞ、命長くてかかる世の末を見ることと、取り返さまほしう、よろづ思しむつかりける。(源氏・少女706)

○せばき縁に、片つ方は下ながらすこし簾のもと近う寄りる給へるぞ、まことに絵にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはとぞ、見えたる。(枕草子・83段。大系120ペ) これらの例も、すべて、「ぞ」のついた連文節が並立して、一つの結びにかかってゆくもので、いま問題としている〔25〕の場合とは、同じでない。

結局、〔25〕の例は、はじめの「なん」を衍とする処置(大東急本の書入れなどに見える)を取るならば、自然な表現となるけれども、しばらく疑問を残しながら、このままにしておくよりしかたがないだろう。

5. なお疑問とすべきもの

〔26〕 久しうわづらひて、秋のはじめのころほひ、むなしくなりぬ。さらにせんかたなくわびしきことの、世の常の人にはまさりたり。(上・康保元年7月。47④)

〔27〕 二月になりぬ。紅梅の、常の年よりも色こくめでたく匂ひたり。わが心ちにのみあはれと見たれど、何と見たる人なし。(下・天延元年2月。205②)

下線を付した「の」は、ともに主格助詞と見るほかはないが、それを受ける述語が、「まさりたり」「にほひたり」と、ともに終止形で文を終止しているのは、文法的には破格と言わなければならないまい。ところが、『全注釈』は、むしろこの「の」の用法を積極的に認める態度をとり、次のように記す。

○この「の」の用法は「この女の見ゆ」(『宇津保物語』俊蔭)などに同じ。(上・143ペ)

○「にほひたり」が述語。このような「の」は、「この女の見ゆ」(『宇津保物語』俊蔭)、「木の

下の、「いさごをしきたるごとうるはし」(同・吹上上)などと用例が見える。(下・108 ぺ) 精細な読みであり、貴重な例の提示で、数えられるところが多い。ただ、宇津保・吹上上の例は、古典文庫では「ママ」の注記を付しており、角川文庫は「木の下いさごの砂、るりを敷きたるごとうるはし」(上・296 ぺ)と本文を改訂しているが、たしかに「いさごをしきたるごと」には疑問がある。

次の例も、「男の」の「の」を、一般には主格助詞と解している。

○女がたに、絵かく人なりければ、かきにやれりけるを、今の男の物すとて、一日二日おこせざりけり。(伊勢物語・94段。大系167 ぺ)

これについて、日本古典文学大系の補注が次のように説いているのは、もっとも一般的な解釈と言えると思う。

「今のおとこの物すとて」の本文は不審であるが異文も見当たらない。……「男の」の「の」があれば「物する」となるはずだし、「物す」とあるためには「の」は不要で、「今の男物す・今の男は物す」などとなければならない所である。

しかし、森野宗明氏は、「の」を主格助詞と解する通説に疑問をさしはさみ、次のように言う。

通説は「今の男がやって来ている」とするが存疑。「をとこの」が主語になるが、それなら、〈主語の・が……述語連体形終止〉(ただし、断定の「なり」が文末をしめくくる場合は別)がこの時代の慣習で、「物する」とありたいところ。「の」を連体格とみて、「いまの男の物(を)す」と解しておく。「物」は、現在の男にも何か絵を頼まれたのだとも、またそれと限定せず、何かのものごとのことだともいずれにもとれる。(講談社文庫『伊勢物語』補注83)

大系も森野氏も、主格助詞「の」と見れば破格となるという点では一致しているが、[26] [27] の例もやはり異例と見るべきではなかろうか。

『全注釈』の指摘する宇津保・俊蔭の例については明解をえないが、[26] については、「…ことの世の常ならず…」となるはずの表現が折れ曲ったもの³²⁾と見るか、「の」を衍とするかであろう。「世の常の人にはまさりたり」という表現は、珍しいように思う。[27] については、「にほひたる、」の誤写と見て改訂し、次の「わがこちにのみあはれと見たれど」に対する目的格と解しうるか³³⁾とも思う。今後の考究・検討をまちたい。

[28] 「きのふは、人の物忌侍りしに、日暮れてなむ、『心あるとや』といふらむやうに、おきたまへし。……」
(下・天延2年5月。240⑥)

作者から遠慮への返事の一部であるが、下線部については古本系諸本みな同じ。通説は「日暮れてなむ」に対して「おき給へし」と結んだもの、すなわち、「給へ」は下二段「給ふ」の連用形と解している。しかし、下二段「給ふ」は、周知のとおり、「思ふ」「見る」「聞く」「知る」など、知覚に関する動詞に下接するのであり、「置く」に下二段「給ふ」がつくと読むことには、問題がある。あるいは「たまへし」は「給へし」で、「給(ふ)べし」と読むのではないかということをもふくめて、今後なお検討の必要があろう。

6. おわりに

蜻蛉日記の本文の中で、主として語法・文法に関連して批判すべき箇所いくつかを取り上げ、検討を加えてきたが、蜻蛉日記の本文には、このほかにも批判すべき問題が残っている。本稿の提起した問題点や導き出した結論についてはもちろん、その他の問題点——たとえば、『全集』が新たに提出した本文批判の態度や結果など——についても、今後の批判・検討をまちたいと思う。

「蜻蛉日記」関係引用文献一覧

- 1) 萩原宗固 蜻蛉日記草稿（草稿）〔大東急記念文庫，正宗文庫に分蔵〕
- 2) 坂 徹 かげろふの日記解環（解環）天明5〔日本文学古註大成による〕
- 3) 田中大秀 かげろふの日記解環補遺（解環補遺）〔未刊国文古註大系による〕
- 4) 喜多義勇 蜻蛉日記講義・改訂増補版（講義）武蔵野書院 昭19
- 5) 川口久雄 かげろふ日記<日本古典文学大系>（大系）岩波書店 昭32
- 6) 喜多義勇 校註蜻蛉日記（校註）武蔵野書院 昭34
- 7) 川口久雄 かげろふ日記評釈1～17「国文学」昭35・1～昭36・8
- 8) 喜多義勇 全講蜻蛉日記（全講）至文堂 昭36
- 9) 秋山 虔・上村悦子・木村正中 蜻蛉日記注解（注解）1～99「解釈と鑑賞」昭37・5～昭46・3
- 10) 佐伯梅友・伊牟田経久 かげろふ日記総索引（総索引）風間書房 昭38
- 11) 柿本 奨 蜻蛉日記全注釈 上・下（全注釈）角川書店 昭41
- 12) 柿本 奨 蜻蛉日記<角川文庫>（角川）角川書店 昭42
- 13) 上村悦子 蜻蛉日記<校注古典叢書>（上村）明治書院 昭43
- 14) 喜多義勇 新訂蜻蛉日記<日本古典全書>（新訂全書）朝日新聞社 昭44
- 15) 大西善明 蜻蛉日記新注釈（新注釈）明治書院 昭46
- 16) 木村正中・伊牟田経久 蜻蛉日記<日本古典文学全集>（全集）小学館 昭48〔以上の（ ）は本論中の略称〕
- 17) 柿本 奨 「蜻蛉日記本文整定試案撮記」（国語国文・昭31年3月）
- 18) 柿本 奨 「蜻蛉日記本文整定試案」（平安文学研究・19輯・昭31年12月）
- 19) 伊牟田経久 「かげろふ日記本文整定案——国語学的処理による二、三の試み——」（未定稿9輯・昭36年9月）
- 20) 木村正中 「蜻蛉日記の対兼家表現における敬語否定論」（玉藻・8号・昭47年3月）

注

- 1) 『全集』の本文で底本を校訂・改訂した箇所は、同書の「校訂付記」に一括して掲げてあるが、3段組みで17ページにのぼる。土佐日記の「校訂付記」は半ページであるから、作品量の差を考慮しても、なお異常に多く、蜻蛉日記の本文に大きな問題のあることを示している。
「校訂付記」に取り上げられた箇所は、総数で1358、うち古本系諸本や「絵詞断簡」「河海抄」所引の本文等による校訂（底本注記を採用したものも含む）は384であり、他の974は江戸時代以降の先学の研究や木村正中氏と筆者との私案に基づく推測本文批判（改訂）である。このほか、『全集』は底本本文に従ったために「校訂付記」には取り上げられないが、他の研究者は底本本文を改訂している場合が約90箇所あるので、蜻蛉日記の本文のうち問題となる箇所は、およそ1450にのぼることになる。このうち、現在の研究者が一致して認めている校改訂は約880箇所、他の約570箇所については、程度の差はあれ、説が分かれていることになる。
- 2) 引用は、特にことわらない限り、『総索引』の本文によるが、適宜かなを漢字に改めることがある。ページ数・行数は、下線部の『総索引』における所在を示す。なお、〔1〕の「いか（五十日）に」「例のごと」は、『注解』『全集』に従って読みを改めた。
- 3) 『草稿』と関連の深い山岡浚明の書入れ本（静嘉堂文庫蔵）には、本文に「箆」の傍書はあるが、頭注の引用はない。
- 4) 『総索引』の本文は底本のまま「今にて」とする説に従ったが、「て」を「ん（も）」の誤りとする説（『大系』『全注釈』など）によって改める。
- 5) 「あやしく露と消えかへりつる」（上・天曆8年秋。13⑧）「わが身をうみとたたへどもくたたふともヲ改メル」（上・天徳元年10月以降。35⑤）などの「と」は、一般に比喩を表わすとされるが、これも同様（主観的認定に基づく状態の表

現)と見てよいであろう。

- 6) 「と」脱の例は、「いとう(と)ましげにて」(39④)「あまになりぬ(と)きく」(68②)など。「ゝ」脱は、「こゝろ」「こゝち」の場合が多いが、「ぬる(ゝ)袖」(88①)「まこと(ゝ)は思はねど」(109④)の例も見える。
- 7) 木村正中氏の論文(引用文献一覧20)に、この部分に言及されたところがある。
- 8) 引用文献一覧19の論文、および『総索引』。
- 9) 「と」を「こと」に誤る例は「人よる所ことはしりたまはぬか」(113⑥)の1例のようであるが、逆に「こと」を「と」に誤る例は、「おほせとはへりつれば」(76⑬)など多い。
- 10) 『全集』では、さらに一步を進めて、「これより」を「かれより」と改訂して地の文と見、「かくなむ……きこえよ」の部分だけを速度のことばと解した(365ペ)。
- 11) 古本系諸本の中に「さむかる」とする本があるが、これは、阿波国文庫旧蔵本に見るような傍注書入れであったものが、本文に混入したと推定する。
- 12) 「平安女流文学のことば」84ページ。
- 13) 引用文献一覧17の論文。この改訂案は、『校註』『注解』(昭39年3月)に取り上げられた。
- 14) 訓点資料には「消つ」「消す」とも見える。春日政治博士の「西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究」の研究篇にも、両語の例をあげ、「ケツは平安朝まで盛に用ゐられて、ケスは比較的後の文献に見え出すやうであるが、已に平安朝初期に成立つてゐたことが知れる」(124ペ)とある。
- 15) 『総索引』は、底本の「もな」を衍として削る処置に従ったが、「な」を「との」二字の連続を誤写したものと推定する説(『全注釈』『注解』など)によって改める。
- 16) 「…去る我の目という意であろう。しかし、そのような言い方の例が管見にはいらぬので…」(上・457ペ)とある。
- 17) 「日本国語大辞典」に引く栄花物語・浅緑の巻の例も、「いやめなる子供のやうに」である。
- 18) 『総索引』は底本のまま「ぬる」としたが、『全注釈』『注解』(昭和43年8月)などに従って改める。
- 19) 「かげろふ日記評釈・15」(国文学<学燈社>昭36年5月)。
- 20) 源氏物語に4、枕草子に8、更級日記に4、見えるが、そのうち、人をさすもの14(「あれはたれ時」1、「あれはたそ」5、「あれはなぞ」2、をふくむ)、物をさすもの2。木之下正雄氏の「平安女流文学のことば」にも、ア系の代名詞とカ系の代名詞とを比較しての論述がある(209~213ペ)。
- 21) 例えば、『全注釈』は「『をらす』の『す』は使役」(下・195ペ)と明記し、『新訂全書』は「また指を折らせるほど…」(224ペ)と注する。
- 22) 引用文献一覧19の論文。
- 23) 引用文献一覧18の論文。
- 24) 今昔物語集にも、巻19の4、巻19の35、巻25の4、巻25の5、などに見える。
- 25) 大鏡には、「けだい者」(大系87ペ)、「けだいの失錯」(同88ペ)という、やや異なる用法が見えるが、これは大鏡の語彙の性格と関係があろう。
- 26) 『全注釈』(上・128ペ)「かくのたまへり」の語釈。同様の処置はほかにも見える。
- 27) 「あはれとばかり思ひつつふる」(下・天禄3年8月。全注釈、角川の163段)も連体形止めであるが、指摘してない。また、「ただ身ぞ憂じ果てられぬるとおほえける」(下・天禄3年2月。同145段)も、「ぞ」に対する結びは「憂じ果てられぬる」であり、「ける」は連体形終止と解すべきであろう。『全注釈』が「ける」を結びと見る(下・27ペ)のは当るまい。
- 28) 「とか」の場合は、「家移りとかせらるることありて」(中・安和2年1月。82⑨)、「源宰相兼忠とかきこえし人」(下・天禄3年2月。178②)、「親の親とかいひし一言」(源氏・朝顔。649⑬)、「いとあやしき梵字とかいふやうなる跡にはべめれど」(源氏・若菜上。1104⑩)など、結びが体言にかかってゆく例がある。「なむ」の場合については、〔22〕〔23〕を参照。
- 29) 『総索引』は底本のまま「らめ」としたが、「ん」を「め(免の草体)」に誤ったものと推測して改訂する『全注釈』の説に従って、改める。
- 30) 鈴木一雄・森野宗明両氏著の「明解国文法」の引用例文より。
- 31) 『総索引』は、この「ぞ」を衍として削除する処置に従ったが、底本のままにおくべきところであろう。柿本契氏の「蜻蛉日記考」(大阪学芸大学紀要・4)、『全講』『注解』(昭和40年6月)『全注釈』などにより改める。
- 32) 『全集』(165ペ)の頭注17。
- 33) 『総索引』の脚注、および『全集』(341ペ)の頭注16。